

白山ふるさと文学賞

第九回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

中高校生の部 優秀賞

母と私

松任高校一年

小家 おいえ

静香 しずか

私の母は少し変わっています。それは生まれも育ちも日本ではなく中国であることです。私は日本人である父と中国人である母の間に生まれたいわゆる混血児であります。

私が小さい頃は中国人である母に対して特に何も思いませんでした。しかし、小学校高学年になるにつれ、「どうして私の母は他の子のお母さんよりも日本語を話すのが下手なのだろう」、「なぜこの言葉の意味を理解することが出来ないのだろう」などと考えるようになっていきました。日本語をともに話すことのできない母と一緒にいることをとても恥ずかしく思い、「一緒にいたくない」とさえ思ってしまう日が度々ありました。

中学生になるにつれ、私の言葉に対する知識も増え、小学生の頃に比べ難しい言葉を使うことも多くなりました。このころから互いの言葉を理解することが難しくなり、母とコミュニケーションをとることも少なくなってしまうました。何をどう話したって理解し合えないと感じ、母との会話を無視するようになりました。

また、母と育った環境や文化が違うため、対立やけんかをすることも多くありました。私が「どうして？」と聞いたことに対する説明をさしても、母の言うことが理解できませんでした。私は、その時「もう母には必要最低限度の会話だけで良い」、そのように感じました。

それは中学二年生の時でした。私は吹奏楽部に所属していました。活動を通して、人間関係が上手くいかず人と関わるのが嫌になり精神的に辛い時期がありました。一人で抱え込んだ結果、急に泣き出してしまうこともありました。「誰かに相談したい」、そう思いましたが、学校の先生には相談できなかつたため、母に泣きながら相談しました。「どうせ相談しても何も理解してくれない」、そう思っていました。母はとても真剣な表情で何時間も私の話を耳を傾けてくれ、必死に理解しようとし、慰めてくれました。その時の母を見て、文化などが違っても自分の子供の話を理解しようとしてくれていることが分かり、少し嬉しい気持ちに

なりました。

中学三年生になり受験について考えなければならなくなった頃、私は母に「塾に通いたい」と言いました。決して経済的に余裕があるわけではありませんでした。母は私の塾に通いたいという願望を叶えるため、仕事の時間を延長してくれました。そのおかげで私は塾に通うことができました。

また、ある日私は夜遅くに母が机に向かって何かをしている様子を目撃しました。「スマートフォンでも触っているのかな」と思い、近づいて様子を見ると、母は日本語の勉強をしています。私はその様子を見て、「どうして大人になって日本語の勉強をしているの？」と聞いたところ、「家族に恥ずかしい思いをさせたくない」と答えました。私はこの言葉を聞いてとても心が痛くなりました。朝早くから夜遅くまで仕事をし、自分の自由時間を削ってまで私に恥ずかしい思いをさせないために十二時過ぎまで必死に勉強している母の姿を見て、申し訳なさでいっぱいになりました。

今まで、あんなに母との会話を無視したり、とても冷たい態度をとったりしたのに、十五年間一度も見捨てずに今まで見守ってきてくれた母の偉大さを改めて実感することが出来ました。叶えられることならすべて叶えてきてくれた母に感謝の気持ちしかありません。それに対して私は冷たい態度をとりわがままをたくさん言ってきたしまいました。十五歳である今、反抗期でもあり、自分の気持ちを素直に伝えることもできず、親孝行ができていないと感じています。

今は反抗期な年頃かもしれませんが、朝早くから夜遅くまで働いている母に「ありがとう」と「ごめんなさい」を伝えたいです。母に言われたことにイライラしてしまう時もあるけれど、私をきちんとした大人に育てるためのことであるということが理解できるようになりました。母がいたからこそ私はここまで生きてくることができました。十五年間支えてきてもらったので、これからは私が母を支えられるようになりたい

と思います。

まだまだ未熟な私ですが、一日でも早く自立し迷惑をかけないようにしたいです。また親孝行もしたいと思います。

十五年間育ててくれてありがとう。そしてこれからも一番身近で見守ってほしいです。迷惑かけることもあるかもしれないけれど私のことを想って叱ってほしいです。これからもよろしくお願いします。

